

木製建具工事業

五輪選手の作る家具

7-8 有限会社 高橋加工部(北海道帯広市)

明治時代から続く木材加工の歩み

北海道帯広市にある高橋加工部。同社では木材を加工して建物内に取り付ける建具（ドアや窓など、建物の開口部分に設けられる仕切り）や家具を作っている企業である。

同社は1897年（明治36年）に設立された高橋木工場を前身として、1951年に加工部門とし独立、事業を開始した。以来、人の生活をより快適にする木製建具や家具を生み出し続けている。また、技能五輪全国大会（以下、技能五輪）出場の選手を抱え、高い技術を持つことでも有名である。



家具を作る田中技能士。
「木は生き物。一枚一枚への対応力が問われます。」

技術者の腕の良さを象徴するもの

同社では、先代の社長の代から技能検定受検を積極的に後押ししている。このような企業方針は、先代社長と、現在の社長である高橋氏が加工技術を持たず、マネージャーとして会社の経営に携わっているということが背景となっている。

「仕事ができるのは、一重に働いてくれている人のおかげ。職人として働いてくれる人たちに良い仕事をしてもらうことが一番重要だと思っています。また、もっといい仕事をしてもらうために必要な知識を身に付けるために、技能検定受検を位置付けています。」（高橋社長）



高橋社長

かつては、自分の技術の高さを自らが持っている道具を見せることで示す職人の多かった建具・家具製作の世界。しかし、先代からの社長の思いによって、徐々に技能検定受検に前向きな文化が生まれてきたという。

新規受注、プロジェクト単価向上に効果

高橋加工部には、技能検定に合格した優秀な人材が多く揃っている。そのような会社のイメージは、案件の新規受注の際に大きなアドバンテージを作り出している。

また、技能検定合格者の多さや、技能五輪出場者が在籍しているという情報は、顧客が同社により難易度の高い（企業にとってはより高い売上を得ることができる、一方、技術者にとっては、より挑み甲斐のある仕事をすることができる）案件の受注に結び付いている。その結果、職人側にも、より要求水準の高い仕事を求める気風が生まれている。

優秀な人材を惹きつける企業環境

高橋加工部には、毎年帯広技術専門高等学校から技能五輪に出場するほどの技術を持ったトップクラスの人材が入社する。彼らが高橋加工部に惹きつけられるのは、同社からの支援の厚さと、磨くための環境の両方とを同社が持ち合わせているためである。

同社では、技能検定に合格すると、2級で5千円、1級で1万円が毎月の給与に反映される。技能士でない職人と比べ、年間6万円から12万円になる。それが、技能検定合格につながっているのである。

また、技能五輪出場選手については、対策のための訓練時間が業務時間に組み込まれ、課題練習のための材料も全て会社が負担している。製作課題として与えられる家具や建具に必要な木材や加工機械などの使用も自由で、業務時間内であっても、ベテランから出場者に対するアドバイスも活発に行われている。

「たとえ、会社を去ることになっても、高橋加工部から来た人であれば腕がいいに違いない、と思われるような人材を育てたい。」（高橋社長）

経営層の資格を重視する姿勢が、勤勉で相互扶助の社内文化の醸成に大きく影響しているようである。

有限会社 高橋加工部

- ▶業種：木材加工
- ▶住所：北海道帯広市東一条南
- ▶代表者：高橋猛文
- ▶設立：昭和26年
- ▶従業員：32名
- ▶技能士：24名

技能士へのインタビュー

宮崎 みちる氏（27 歳） 2 級建具製作技能士、2 級家具製作技能士

西田 雄哉 氏（20 歳） 2 級建具製作技能士、2 級家具製作技能士

入社のきっかけ：キーワードは技能五輪

高橋加工部は技能検定の受検を奨励するとともに、技能五輪についても実績を持っている。今回は、五輪出場経験のある宮崎技能士、西田技能士にお話を伺うことができた。

宮崎氏は元々他の企業で事務作業をしていた。業務は自分に合っていたが、元々モノづくりに興味があったため、専門学校に入学。2 年研鑽を積んだ後に高橋加工部に入社した。本人は就職できるとは思っておらず、就職先がなかったら故郷に帰って酪農をしようと考えていたそうである。しかし、五輪出場のために頑張っているときに高橋社長と知り合い、それが縁で高橋加工部に就職した。

一方、西田氏は専門学校を卒業したばかりである。小さい頃から大工になるのが夢だった西田氏は、専門学校では建築学科に進もうと思っていたが、技能五輪のことを知り、建具・家具製作の分野に進む。インターンで高橋加工部の職場に入った際、同社の環境の良さや、そこで働く人の人柄の良さ、そして、技能五輪に対する同社の積極的な魅力を感じ、入社を決断した。

モノづくりへの興味と技能五輪の存在が 2 人の高橋加工部入社のきっかけになっている。



加工機械を扱う西田氏

建具・家具を自分の手で作り上げる楽しさ

技能五輪に出場するほどの高い技術力を持ったお 2 人にとって、仕事の魅力について伺った。

「元々建具や家具を見たり触ったりすることが大好きでした。完成したものを見るのも、それができ上がっていくプロセスを見るのも好きですね。今は設計図を書く仕事をしていますが、自分で書いた図面を元に職人さんが実際の形にしてくれるのは仕事の魅力の 1 つです。施工図の作成は、現場の業務の進捗状況に合わせて調整することが重要です。その調整がうまくはまってスムーズに業務が進んだ時は気持ちいいですね。」（宮崎技能士）

「元々建物が日々組み上がって行って、毎日違った姿になっているのを見るのが好きだったこともあり、家具や建具の接合部分などの仕組みがどうなっているのかを見るのが好きです。まだ会社で仕事をするようになって間もないですが、自分であらかじめ考えた段取りがうまく運んだときは気持ちいいですね。」（西田技能士）

自信のウラツケ、仕事のキホン

宮崎、西田技能士は、ともに建具製作と家具製作の 2 級技能士である。2 人にとって、技能検定とはどのような存在なのだろうか。

「正直なところ、実際の仕事で使えるシーンは多くはないんです。でも、検定合格のために頑張った経験や、技能士であるということが、仕事をするときの自信になっています。」（宮崎技能士）

「技能検定は仕組みや行程の基本について学ぶ良い機会だったと思います。また、手加工の良さに触れられたという意味で、検定合格に向けた勉強も有意義だったと思います。」（西田技能士）

仕事にも 自分のキャリアにも前向き

宮崎、西田両氏は今後のキャリアについてどのように考えているのだろうか。

「施工図の作成を担当していることもあり、将来はうまく段取りができるようになりたいですね。自分で家具や建具を製作することも大事ですが、職人さんが作りやすい施工図を書くことも重要だと思っています。モノを作り出すための土台としての施工図の作成にやりがいを感じるようになりました。」（宮崎技能士）

「加工、取り付けなど、どれか 1 つの業務を偏ってしていくのではなく、オールマイティに対応できるような応用力のある職人になりたいですね。」（西田技能士）

自分の仕事と、自分の今後に楽しみを感じている、そんな前向きな姿勢が強く感じられた。



施工図を作成する宮崎氏